

十和田湖のヒメマスをこれ以上減らさないために（池産親魚による種苗生産）

加藤 禎一

ヒメマスが生息する日本の代表的な湖は十和田湖、中禅寺湖、支笏湖である。何れもほぼ一世紀に亘って人工ふ化放流が行われている湖である。

これまでにヒメマスを放流した湖が多数あるにもかかわらず殆ど増えていないことを考えると、日本の湖の場合稚魚の放流は不可欠の条件のように思われる。

これほど重要な稚魚の放流であるが、最近の十和田湖は、親魚の不漁によって採卵数が著しく減り、平成 12 年（2000 年）31 万粒、平成 13 年（2001 年）27 万粒、平成 14 年（2002 年）26 万粒となって、過去 51 年間の平均 176 万粒の 1/6 程度しか採卵出来ない状態が続いている。これほど少ない状態が 3 年も続いた例は、ふ化放流事業の再開直後の昭和 27 年（1952 年）当時を除けばこれまでに例がない。稚魚の放流が大幅に減った状況が続いているだけに漁業や遊魚への影響が懸念されている。

嘗ては支笏湖や中禅寺湖から卵を補充したこともあったが、現在これらの湖も十和田湖と似たような状況にあるのでそれを期待するのは難しい。

このように時に役立つのが池産の親魚による種苗生産とその稚魚の放流である。基本的な考え方はヒラメやマダイで行われている栽培漁業と同じであるが、現在人の手で行うことが出来る唯一の積極的な手段でもある。ただ、ヒメマスの場合は 25 年以上の実績のあるヒラメやマダイと違って稚魚から育てなければならないので多少時間が必要である。

ヒメマスに限らず川や湖に生息する魚を池で飼育すると、普通は殆どの魚が成熟する前に病気にかかって死亡する。数百尾の魚が全滅することも珍しくないほど、自然水域にいる魚を池で繁殖させることは想像以上に難しいのである。これは捕獲した野生のパンダやトキの繁殖が難しいのと全く同じである。

嘗て十和田湖ふ化場では、この困難な仕事に取り組み 8 年もかかって池産の親魚から採卵するのに成功している。今から 29 年も前の昭和 50 年（1975 年）のことである。

その後池産親魚の種苗生産は順調に進んで最盛期の昭和 62 年（1987 年）には 371 万粒を採卵するまでになった。これは池産ヒメマスの採卵数としては空前の記録で画期的な成果である。

その成功の最大の秘密は、全滅に近い状態で生き残った魚の子を親に育てるという方法である。池の飼育環境に耐えて生き残った魚の子であるから、親と同じように池の飼育に強いと考えられている。

十和田湖では平成 9 年（1997 年）に池産親魚の飼育を中止しているのでゼロからのスタートになるが、放流稚魚が不足している現状から脱却する唯一の方法だけに早期再開が望まれる。

この場合も、大量の種苗は必要ないので、現状に合う目標卵数を設定して、それに応じた

尾数を飼育するなど効率的な方法に務めることが重要である。

また親魚の飼育も、飼育施設や推量の十分でない現在のふ化場で実施しなければならない理由はない。むしろ、防疫上、秋の湖産親魚と池産親魚の接触を避けるためにも別の場所を実施するほうが望ましい。また、養殖業者に飼育を委託するのも一つの選択で、いずれにしても手遅れにならぬよう早急に対処することが望まれる。